

説教 『恐れぬ者、恐れる者』 山本 護牧師  
聖書 ホセア書 11:1~4 / マタイによる福音書 2:19~23

幼子イエスの命を守るために、ヘロデ王の権力が及ばないエジプトへ逃げたヨセフたち(マタイ2:14)。そこで幾年か過ごす、夢に天使が現れ「命をつけ狙う者どもは死んだから帰郷せよ」と告げる。「ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た(2:21)」。だが故郷ベツレヘムは、王の三人の息子中もっとも凶暴なアルケラオの領地となっている(2:22)。するとまた「夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行き住んだ(2:22~23)」。ヨセフは旅立つにも、帰郷するにも、辺境のガリラヤへ移住するにも、天使の声、つまり神の御心に従った。思い返せば、マリアを嫁に迎える時も、自分の義を脇へ置いて示された命運を引き受けた(1:18~25)。ヨセフは、さぞや波立ったであろう内面の混乱を表に出さず、不可解な使命と辛い旅を黙々と引き受けた。

「インマヌエル=神は我々と共におられる(1:23)」徴であるキリストの降誕は、東方の異教徒にとっても真の希望である(2:2)。ということは、ヘロデや王都エルサレムの民もその内側にあるはずだ。ところが彼らには、真の救いなど目障りで(2:3)、狂気の沙汰に走る(2:6)。それにしても、新たなる真の救いを受け取るヨセフや異教徒と、それを拒絶するヘロデらの違いは何なのか。「恐れ」ではないのか。

ヨセフは夢で聞いた「恐れず妻マリアを迎え入れなさい(1:20)」という声を、自分の判断に優先させて「恐れず」神に従った。しかしヘロデらは、権力や地位に拘泥する自分を優先して「恐れた」。ヘロデは敬虔な王でもあり神殿復興に熱心だったが、真なる救いを恐れた。王都の民もまた優越感が大事で新たな救いを恐れた。彼らは、ローマ帝国の傀儡王朝であったとしても甘い汁が吸いたいのだ。

遠い国の御伽噺ではない。今日もなお「恐れ」によって、欧米やロシアは「敵対勢力」を空爆し、そのとぼっちりで無辜の民が殺されている。先進諸国には、自らに都合のいい「世界基準と利益配分」が揺らぐことへの恐れが底流にあり、それに触れると軍備をちらつかせて威嚇する。王や、王都の民のように既得権を手放したくないのだ。そして日本の政治は、そんな大樹の影で虚勢を張っている。

神の御手は、いかなる時も人を救うために差し伸べられている。恐れによって御手をふり払っても、罪なるたくらみに流されても、救いの徴は与えられている。混乱の中へいっそう沈み込む中、私たちは救いの徴をどのように知りうるのか。何より、おしゃべりをやめ、沈黙して耳を澄ましていること。「恐れるな」という言葉は闇の中(夢)でこそ聴きうる。そして恐れず、自分に与えられる使命に従う。それは傍目に立派なことではないかもしれない。ヨセフらの旅とて片隅の出来事だったのだから。

「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした(ホセア11:1)」。エジプトから帰還した幼子イエスは、遠い昔の「出エジプト」の歴史を想起させ、新たな、根本的な救いの到来を自覚させる。「わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き、彼らの顎から轡を取り去り、身をかがめて食べさせた(11:4)」。罪多き私たちに対して、身をかがめて食べさせて下さるほどの「神の愛」。降誕されたキリストがそれを体現している。だから私たちは、「恐れる」ことなど決してない。



【おまけのひとこと】

救いの徴に気づかぬと 妄想が人間を縛る 人間の狂気は妄想を喰らって いくらでも増殖する  
醜酵菌は旨味を深めて生かす そこに腐敗菌は増殖できない 妄想の器に救いの徴が満ちるなら